

平成24年度事業報告

(平成24年4月1日～平成25年3月31日)

公益社団法人日本馬術連盟（JEF）は、平成24年1月28日の第97回通常総会において承認された平成24年度の事業計画および収支予算に基づき、理事会の決定・承認のもとに以下の事業を実施した。なお、一部については、期中に補正を行った。

平成24年度は、第30回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）への参加が中心的な事業であった。

ロンドンオリンピック馬術競技3種目に8人馬を派遣した。

総合馬術には5人馬が出場し、1種目目の馬場で大岩選手が日本馬術史上はじめて1位となり、団体6位につけたが、クロスカントリーで弓良、佐藤、大岩選手が失権して最終的に根岸選手が39位、田中選手が48位となった。

馬場馬術には法華津選手が出場して、大会最高齢の出場選手として注目を集めた。法華津選手は、予選競技で前回の北京大会よりも良い成績ではあったが、40位で決勝に進むことはできなかった。

障害馬術に出場した武田選手は、第2次予選に進むことができなかつたが、杉谷選手は第3次予選を通過し決勝ラウンドまで進んだ。しかし、決勝ラウンドの1走行目で拒止があり33位となって2走行目に進むことはできなかつた。

当連盟は平成24年4月1日付けで公益社団法人に移行した。

当連盟の平成18年のJOC専任コーチ等設置事業において、2名から計240万円の寄付を受けたことについて、連盟の負担を回避したとの指摘を会計検査院から受け、JOCに加算金を含めて補助金の返還を行つた。

スポーツ界における体罰問題に対応するため、馬術界における実態の把握に努めるとともに、役職員倫理規程、会員倫理規程を改正し、相談窓口を設置した。

各事業については、以下のとおり；

1. 馬術の普及・振興

(1) 馬術に関する情報システムの運営

- ① ウェブサイトを運営し、競技会の情報や規程の改正などの情報を迅速に広報した。
- ② 競技会の実施要項や成績速報、講習会の案内などを迅速に掲載するとともに、『馬術情報』とウェブサイトをリンクして広報の充実を図った。

③ マーケティングを充実させるため、ウェブサイトにスポンサーを表示する等の改善を行った。

(2) 機関誌発行

① 情報を的確に伝達し、馬術の振興および各種記録の保存に資するため、月刊機関誌『馬術情報』を刊行した。

② 『馬術情報』を日馬連会員、関係団体、マスコミ各社に配布するとともに、購読希望者に対し頒布した。

(3) 馬術関係資料の作成・配布

① 各種規程集および日馬連で扱う馬術競技の紹介・ルール解説等の資料を作成し、頒布した。また、競技会プログラムにもルール解説を掲載し、競技場にて配布した。

② マスメディアに対し情報を積極的に提供した。特に、朝日新聞、山梨日日新聞、山梨放送、静岡新聞、静岡放送には大会の後援を依頼し、広報を充実させた。また、ＮＨＫの全日本障害パートⅠ放映に協力し、グリーンチャンネルで国体馬術競技を録画放映した。

③ オリンピック壮行会ならびに法華津選手記者会見を開催し、マスメディアにオリンピック出場選手、サポートスポンサー等を紹介した。

(4) 各種表彰

① 永年に亘り馬術界に功績のあった人馬6名22頭を表彰した。また、国内外競技会において、優秀な成績を収めた人馬16名33頭を表彰した。

② 競技馬の資質向上のため、優秀な成績を収めた乗馬に対して飼育奨励金を交付した。

③ 競技馬の資源確保および調教技術向上を図るため、優秀な成績を収めた内国産馬（元競走馬を含む。）に対して飼育奨励金を交付した。また、優秀な成績を収めた内国産乗用馬の生産者に対して感謝状を贈呈した。

(5) 馬術基盤の維持拡大

① 組成団体に対しその加盟する団体が所有する馬匹について、飼育費助成および優秀乗馬助成を行った。また、都道府県馬術連盟および組成団体等の事業費・事務費の助成を行った。

② 馬事関連団体と連携し、馬術の普及・振興に努めた。

③ 内国産馬の振興を図るため、内国産馬限定競技を主催競技会に組み入れるなど、内国産馬の活用を促進した。

④ 4月1日付けで登記し公益社団法人に移行した。また、それに伴い各種規程を整備した。

2. 会員と乗馬の登録

- ① 会員（個人 6,380、県馬連所属団体 362、組成団体所属団体 280）および乗馬（3,773）の登録を行った。
- ② 国際馬術連盟（F E I）新規登録馬の個体識別にマイクロチップの導入を開始した。
- ③ F E I 公認競技会に参加する人馬および競技役員のF E I 登録事務を実施した。
- ④ 「J E F 情報システム」を活用し、登録における会員サービスの向上および事務の合理化を図った。

3. 競技会規程の制定、各種資格の認定

- (1) N F 活動（National Federation：国内を統括するスポーツ団体）
国際情報を迅速に収集するとともに、日本馬術界の国際的地位向上を図るために、F E I およびアジア馬術連盟の活動に積極的に参画した。
- (2) 競技会規程の制定・整備
J E F の各種規程の制定および改廃を行った。また、F E I 各種規程の制定・改廃に対応して、国内規程を改正し、F E I 規程の国内適用を図った。
- (3) 競技役員資格
 - ① 審判員等技術役員資格者の認定および資格保持者の技術向上のため講習会（10回）を実施するとともに、都道府県等が開催する講習会（10回）を公認した。
 - ② 障害馬術競技で使用するコースの設計および設営を担うスペシャリストとしてのコースデザイナー講習会を開催し資格を認定した。
 - ③ 国際競技役員養成のためのF E I 公認講習会は開催しなかったが、F E I 公認の講習会・研修会等に適格者（コーチ3名）を派遣した。
- (4) 指導者資格
 - ① 日本体育協会公認スポーツ指導者
(公財)日本体育協会が制定する公認スポーツ指導者制度に基づく統一カリキュラムによる日本体育協会公認馬術コーチ養成専門科目講習会を開催し、馬術に特化した馬術コーチ（6名）・指導員（8名）の増員を図った。
 - ② 日本馬術連盟認定馬術指導者（準コーチ）
馬術指導者の資格認定・更新ならびに専門知識習得と資質向上のため、日本馬連独自のカリキュラムによるJ E F 準コーチ養成講習会を開催し、指導者（44名）の増員を図った。
- (5) 選手の資格認定

主催・公認競技会・国際競技会参加のための騎乗者の資格認定・登録を行つた（A級39名、B級493名、C級122名）。

都道府県等が開催する騎乗者資格認定のための講習会（B級26回、C級25回）を規定に基づいて公認した。

(6) 競技会の公認

JEF公認競技会のカテゴリー制・馬のグレード制を円滑に運営し、活性化に努めた（障害94、馬場59、総合8、エンデュランス16、合計177）。

4. 選手の強化

- ① 騎乗・調教技術の向上を図るため、海外からコーチを招聘して強化訓練を実施した（障害1、馬場1、総合2）。
- ② 文部科学省の進めるナショナルトレーニングセンター中核拠点施設整備の馬術競技強化拠点として御殿場市馬術・スポーツセンターを活用した（25回、うちJEF8回）。
- ③ ロンドンオリンピック総合馬術直前合宿を実施した。また、国際レベルの選手を育成するため、ヤング・ジュニア層の発掘および強化のため研修会を10回開催するとともに、海外の競技会・強化訓練等に若手選手を派遣した（障害2、馬場2、総合2）。
- ④ 優秀な成績を上げた選手をナショナルチームメンバーに認定した（障害9人馬・プログレス20人・プログレスジュニア21人、馬場6人馬・プログレス44人馬・プログレスジュニア21人馬、総合10人・プログレス6人・プログレスジュニア15人）。
- ⑤ また、ジュニアアスリート担当のJOC専任コーチングディレクターを2名（馬場1、総合1）設置し、将来を担う若手の育成を図った。
- ⑥ 「一貫指導・競技者育成プログラム」実践のための指導参考資料を作成した。
- ⑦ 平成18年のJOC専任コーチ等設置事業において、専任コーチ2名から計240万円の寄付を受けたことについて、連盟の負担を回避したとの指摘を会計検査院から受け、JOCに加算金を含めて補助金の返還を行った。
- ⑧ スポーツ界における体罰問題に対応するため、馬術界における実態の把握に努めるとともに、役職員倫理規程、会員倫理規程を改正し、相談窓口を設置した。

5. 競技会の開催

(1) 競技会の開催

全日本障害馬術大会（パートⅠ、パートⅡ、ジュニア）、全日本馬場馬術大会（パートⅠ、パートⅡ、ジュニア）、全日本総合馬術大会（パートⅠ、ヤング、ジュニア）、全日本エンデュランス馬術大会ならびに第47回日韓馬術競技会を主催した。また、障害・馬場の全日本ジュニアおよび全日本ヤング総合馬術大会はIOCジュニアオリンピックカップ大会として主催した。

(2) 国民体育大会の共催

第67回国民体育大会馬術競技（岐阜県山県市）を文部科学省他の団体とともに主催した。

(3) F E I 公認競技会

① J E F主催により、F E I公認馬術大会を4回（チルドレン障害1、馬場2、総合1）開催した。

② 日本国内で会員団体が主催するF E I公認馬術大会11大会（障害4、馬場1、エンデュランス6）の開催を支援した。

(4) ドーピングの防止

① 打合せ会等での関係者に対する指導を通じて、馬のドーピング防止に努めた。

② 主催競技会（17頭）およびF E I公認大会（9頭）において馬ドーピング検査を26頭に実施した。

③ 日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と協力して、競技者のドーピング検査を20名に実施した。

(5) 2020 東京オリンピック招致活動

2020 東京オリンピック招致のIOC評価委員の視察に伴い、障害馬術の供覧とともに馬術関係者の動員を行い、招致活動に協力した。また、機関誌『馬術情報』並びにウェブサイトでの広報や、競技会での啓発等により招致機運の向上に努めた。

6. 国際競技会への派遣・支援

① 国際競技会等へ選手・役員を派遣（障害3、総合2）し、競技力向上ならびに海外情報収集に努め、併せて国際交流・親善を深めた。

また、ロンドンオリンピック障害馬術競技代表人馬選考会をドイツ・ヴィスマーデンで開催し、4人馬の中から武田麗子選手＆アリを代表選手に選出した。

② ロンドンオリンピック馬術競技には、3種目に8人馬を派遣した。

総合馬術には5人馬が出場し、1種目目の馬場で大岩選手が日本馬術史上はじめて1位となり団体6位につけたが、クロスカントリーで弓良、佐藤、

大岩選手が失権して最終的に根岸選手が39位、田中選手が48位となった。

馬場馬術には法華津選手が出場して、大会最高齢の出場選手として注目を集めた。法華津選手は、予選競技で前回の北京大会よりも良い成績ではあったが、40位で決勝に進むことはできなかった。

障害馬術に出場した武田選手は、第2次予選に進むことができなかつたが、杉谷選手は第3次予選を通過し決勝ラウンドまで進んだ。しかし、決勝ラウンドの1走行目で拒止があり33位となって2走行目に進むことはできなかつた。

- ③ 平成24年度は日本リーグ優勝人馬がCSI-W Finalへ参加しなかつたため、輸送支援は実施しなかつた。
- ④ 世界各国におけるFEI公認馬術大会に参加する日本選手（障害12名延282頭、馬場2名延11頭、総合7名延55頭、エンデュランス3名延5頭）を支援した。
- ⑤ 国際馬術基盤強化推進支援事業（JRA特別振興事業）
 - ア. ロンドンオリンピック障害馬術競技個人代表人馬選考会を開催した。
 - イ. ロンドンオリンピック出場馬の輸送費を補助した。
 - ウ. 国内で所定の成績を上げた馬に対する日本から海外への輸送支援は、該当馬がおらず実施しなかつた。
- エ. 2014世界馬術選手権の出場資格の取得に向けて、FEI公認のCDI3☆馬場馬術大会を2回開催した。

【平成24年度会員登録数】

区分	H24. 3. 31 (A)	入会	退会	H25. 3. 31 (B)	差引増減 (△減)	対前年比 (B/A)
(1) 正会員	71	0	16	55	△ 16	77.46
イ. 都道府県馬術連盟	47	0	0	47	0	100.00
ロ. 組成団体	4	0	0	4	0	100.00
ハ. 学識経験者	20	0	16	4	△ 16	20.00
(2) 登録会員	7,057	611	646	7,022	△ 35	99.50
イ. 個人	6,410	589	619	6,380	△ 30	99.53
ロ. 県馬連に所属する団体	364	15	17	362	△ 2	99.45
ハ. 組成団体に所属する団体	283	7	10	280	△ 3	98.94
全日本学生馬術連盟	82	0	1	81	△ 1	98.78
全日本高等学校馬術連盟	103	6	9	100	△ 3	97.09
日本乗馬少年団連盟	65	1	0	66	1	101.54
日本社会人団体馬術連盟	33	0	0	33	0	100.00

【平成24年度乗馬登録数】

区分	H24. 3. 31 (A)	登録	抹消	H25. 3. 31 (B)	差引増減 (△減)	対前年比 (B/A)
乗馬登録数	3,755	581	563	3,773	18	100.48

平成24年度F E I登録者数

区分	選手	馬匹
障害馬術	68	123
馬場馬術	28	35
総合馬術	11	13
エンデュランス	19	17
軽乗	1	0
パラ馬術	1	0
計	128	188

平成24年度F E Iパスポート交付・更新数

新規交付	42	(うちマイクロチップ埋込み 4件)
更新	33	
変更	31	
再発行	2	